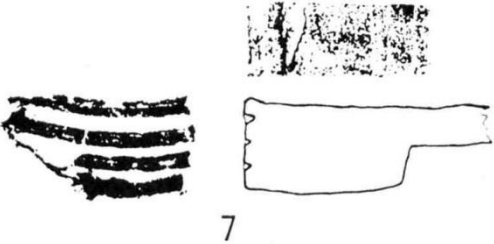
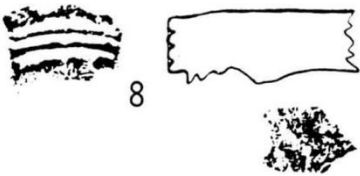



法海寺遺跡

法海寺遺跡の古瓦は、昭和 33・34 年に杉崎章氏・芳賀陽氏により伽藍地の一角で発見された瓦溜りの調査資料と昭和 48 年境内に八幡福祉会館を建設するに先立って行った調査で出土した古瓦の資料がある。これにより、法海寺の創建は白鳳時代に遡ることが明らかになった。

出土古瓦を年代別に総括すると次のようになる。

年 代	法海寺遺跡・出土品拓影	
白鳳時代	<p>重弧文軒平瓦</p> <p>薄手なつくりの四重弧文軒平瓦で、瓦当面の厚さは 3.8 cm である。</p>	 <p style="text-align: center;">7</p>
	<p>重圈文軒丸瓦</p> <p>周縁部を四重圈文でかざった軒丸瓦であるが、内区の文様は欠損して不明である。</p>	 <p style="text-align: center;">8</p>
	<p>蓮華文軒丸瓦</p> <p>肉が厚く幅の広い大きな蓮弁をもち、弁と弁との間に線がとおっている。</p>	 <p style="text-align: center;">1</p>

年代

法海寺遺跡・出土品拓影

奈良時代

塔心礎石

本堂の東側前方に石柵に囲まれて、花崗岩でできた心礎の石が保存されている。この位置は後世に動かされていて遺構復原の基準にできないのは惜しまれる。

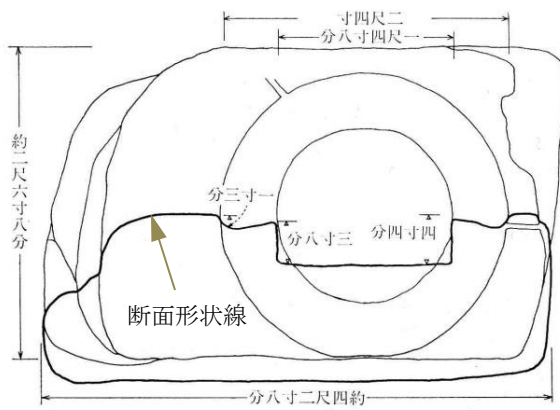


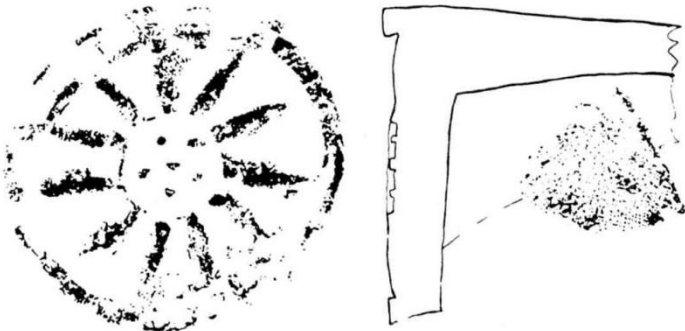


図1-70 実測図(原図・坂重吉)



年 代	法海寺遺跡・出土品拓影	
奈良時代 前葉	<p>蓮華文軒丸瓦</p> <p>八葉の蓮華文で、肉の厚い弁は丸味を帯びている。外縁は素縁である。</p>	 <p>3</p>
	<p>蓮華文軒丸瓦</p> <p>単弁八葉で周縁は素縁、丸みを帯びることなく、先端部は細くとがり反転気味である。中房を欠いているが、この資料と同型式とみられる瓦が西春日井郡西春町の弥勒寺廃寺から出土しており、これによる大きな中房に十数個の蓮子が配されている。</p>	 <p>2</p>
奈良時代 後葉	<p>蓮華文軒丸瓦</p> <p>鋭い笹葉形の単弁を十一葉めぐらし、弁間は空白のままである。中房の部分がくぼんでおり、蓮子は中央に1個と周りに5個が配されている。外縁は素縁で、直径は13.6 cmである。</p>	 <p>4</p>

年代

法海寺遺跡・出土品拓影

平安時代

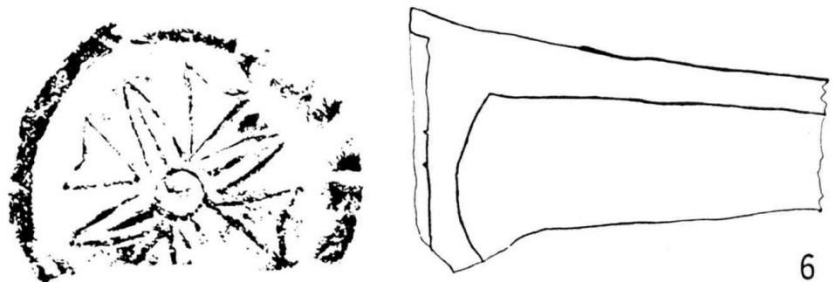
蓮華文軒丸瓦

中房は扁平でわずかに突出しており蓮子は認められない。中房から四方に向かって槍先形の蓮弁を凸線で描き蓮弁の中にも同じ凸線で先の尖った線が入れている。外縁は素縁で、直径 14.2 cm。変形蓮華文をもつ古式の軒丸瓦である。



蓮華文軒丸瓦

大正 3 年 7 月 8 日、本堂裏の路上に瓦の一角が露出していたのを手がかりに、浜岡佐一郎氏が採集し、法海寺の代表的な遺瓦として従来から知られていたものである。左図 5 をさらに意匠化したもので、中房は円環状に陽刻されており、蓮子はない。弁と弁の間には二個の鈍角三角を背中合わせにしたような形の間弁を描いている。凸線はすべて断面が三角形を呈しており、外縁は素縁である。直径 14.3 cm。変形蓮華文軒丸瓦で西春町の弥勒寺廃寺からも同類の資料が出土している。



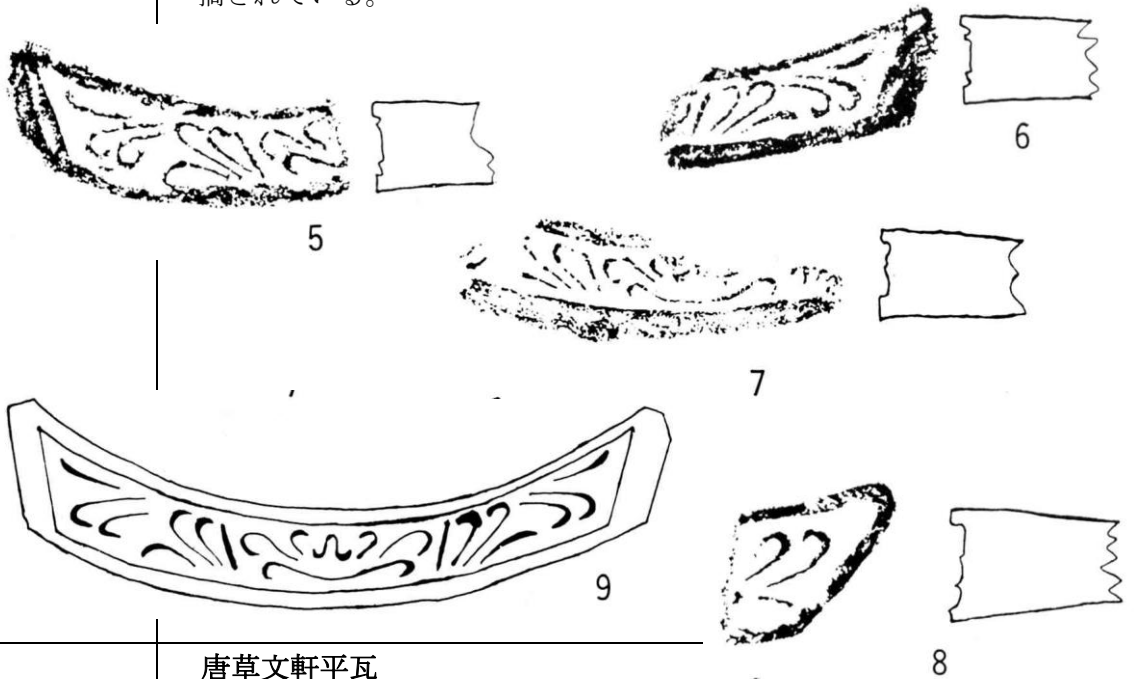
年 代

法海寺遺跡・出土品拓影

平安時代

唐草文軒平瓦

上下にしっかりした周縁をもった軒平瓦で、内区の唐草文との間には珠文帯はみられない。10個近い資料で各部を補いながら、瓦当面の全体を復元してみると下図9のように、蕨手に近い唐草文様が施され、中央部の左右に外方へ開いた縦位の界線があつて、3個の文様帯に区切られている。中央部の文様帯は逆V字形の飾文様を中心として、下に長い唐草を左右にのばし、その両端の上にそれぞれ蔓を配している。縦位の界線で区切られた左右の文様帯は、界線にそつて3本と、文様の両端に3本、相互に対象した文様構成となっている。上下の厚さは約4.1cm、左右の幅は約26.1cmである。この軒平瓦も西春町弥勒寺廃寺から同類の出土していることが指摘されている。



唐草文軒平瓦

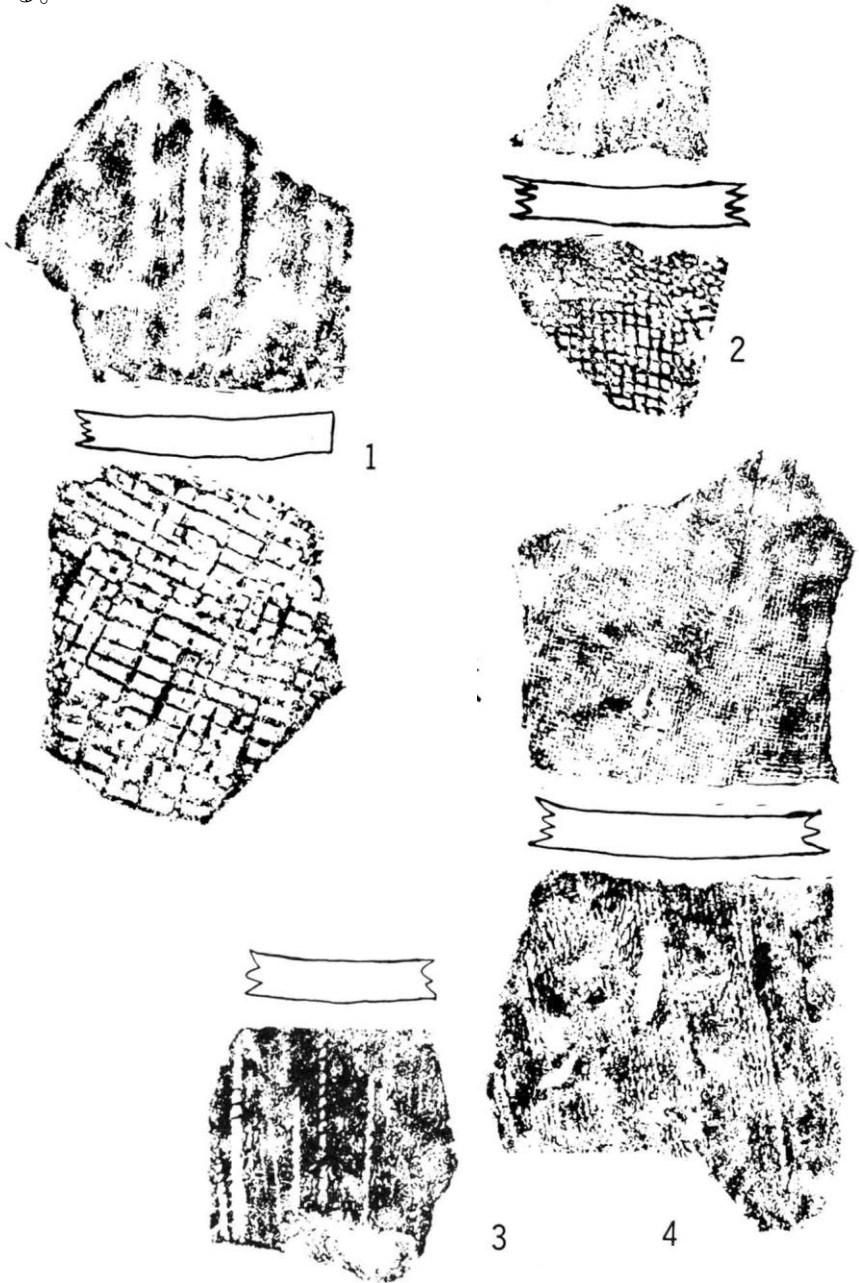
右端の破片が1個しか検出されていない(上図8)。上述の唐草文軒平瓦とよく似ているが、右端部にみられる3本一組の唐草文に相違点がある。すなわち、前者が上の1本のみ上方へ向いていて、他の2本は下方へ向くのに対し、この資料は上方2本の蔓が上へはねあがっている。さらに、瓦当面の形で、上縁の長さが下縁より長く、上端部がすどく鋭角をなしている。上下の厚さも前者に比して厚くなっている。

年 代

法海寺遺跡・出土品拓影

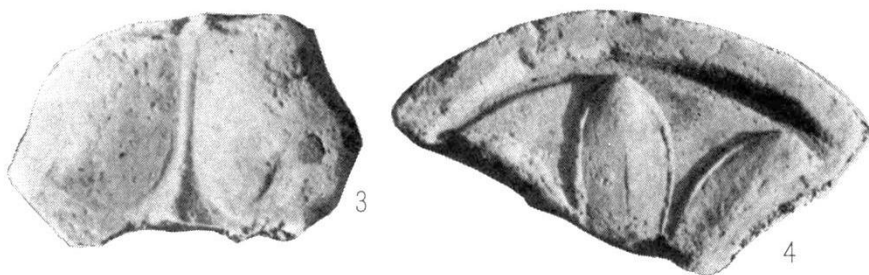
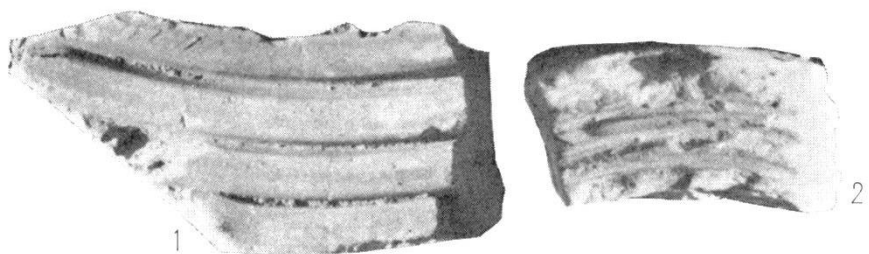
平瓦・丸瓦の
文様

平瓦や丸瓦についても各種の文様がみられる。平瓦の凹面にはほとんど布目文が残っているのに対し、凸面の方は格子目（下図1，2）のあらいものやこまかいもの。さらに縄のれんをさげたもの（下図3，4）、斜方向に整形したものもあった。そして丸瓦の内側には鮮やかな布目文が残っている。



こうして法海寺出土の遺瓦を総括してみると、まず注目されるのは西春日井郡西春町の弥勒寺廃寺ならびに一宮市萩原町の中島廃寺出土の古瓦との類似である。とくに弥勒寺については、奈良時代前葉と平安時代前葉の両時代にわたり同型あるいは類似瓦を出土している。奈良時代前葉の単弁八葉蓮華文瓦については、法海寺出土の瓦が中房を欠いているのに対し、弥勒寺の資料は中房の部分も遺存していて、補強し文様構成を知ることができた。そして、平安時代前葉の変形四弁蓮華文丸瓦についても、細部について検討すれば間弁の中央の背中合わせの界線がある弥勒寺廃寺・中島廃寺に対して省略された法海寺など少しずつの相違が見られるものの全体としてきわめて類似している。

法海寺遺跡出土の古瓦写真（1）



法海寺遺跡出土の古瓦写真（2）



法海寺遺跡出土の古瓦写真（3）

